

加賀市の保育のみらい～創造性をはぐくむ保育・教育 実践事例報告会～ 開催レポート



石川県加賀市では、2023年度より、幼児教育の質向上事業として、北イタリアの自治体で生まれた教育アプローチ、レッジョ・エミリア・アプローチからの学びを取り入れ、子どもたち一人ひとりの創造性を引き出し、0歳から始まる学びのみらいを保障する保育・教育をめざして新たな取り組みを進めています。

私たち、まちの研究所株式会社は、2023年3月、加賀市と包括連携協定を結び、加賀市のこれら取り組みを、加賀市のプロジェクトチームメンバーと共に推進してきました。取り組みの初年度となる2023年度は、加賀市公立保育園のリーディング園（加陽保育園、スワトン保育園）を中心に、子どもたちの探究的な学びの充実を図るため、保育実践への伴走支援を行いました。また、公立保育園関係者向けのアンケート調査結果や保育実践への伴走を進める中で見えてきた保育現場の課題感を踏まえ、市役所の保育・教育関係者、園現場の先生方との対話を重ね、これからの加賀市の保育・教育において大切にしたい保育ビジョンと3カ年の行動計画を「加賀市保育ビジョン2024-2026」として策定するご支援を行いました。

ここでは、2023年度の成果発信の場として2024年3月9日に加賀市で開催された、「加賀市の保育のみらい～創造性をはぐくむ保育・教育 実践事例報告会～」についてレポートします。報告会では、「創造性を育む保育・教育」の実現に向けた今年度の加賀市の取り組み、保育現場での実りが、実践事例を中心に報告されました。また、基調講演では、こども家庭庁こども家庭審議会長の秋田喜代美先生より、これからの時代の乳幼児期の学びのあり方や探究的な学びの意義について講演いただきました。

報告会が開催されたのは、かが交流プラザ さくらの中にある加賀市イノベーションセンター。開催当日は、市内の保育・教育関係者、児童の保護者を中心に120名余りが参加。また市内外の関心層含め、オンラインで100名近

くの参加があり、総勢 220 名程が集まりました。能登半島沖地震の関係もあり、大人数で集まることができる市内会場に限られる中ではありましたが、会場のレイアウトを工夫し、参加型のプログラムになるよう、そして参加者同士の交流が生まれるよう、随所に工夫を設けました。また、会場に集まった方々に、今年度の加陽保育園での実践から生まれた子どもたちの創造性あふれる表現の1つ1つを実際にみていただきたい、という先生方のアイデアから、会場内には、子どもたちの表現や、その表現が生まれるプロセスを丁寧に記録したドキュメンテーション（保育記録）が合わせて展示されました。





報告会の冒頭、宮元加賀市長の挨拶では、時代背景が大きく変化し、これまでの教育のあり方が行き詰まりを見せる中、「Be the Player」のスローガンの下、学校教育（初・中等教育）で進められている教育改革と合わせて、幼児教育の改革を一体的に進めていくべき時がきていること、今年度から加賀市の公立園を中心に取り組んでいるレジョ・エミリア・アプローチからの学びを踏まえた保育実践は、まだまだ緒に就いたばかりだが、教育は一朝一夕で成果がでるものではなく、腰を落ち着けて取り組んでいきたい、保育の質を保障し、子どもたちを丁寧に育ていく仕組みを、全国に先立って加賀市で使命をもって取り組んでいきたい、という強い思いが発信されました。





(参考) 別日、加賀市長が加陽保育園の保育実践の様子を見学する様子

加陽保育園の「はじめのいっぽ」



続く、加賀市加陽保育園で取り組まれた保育実践の報告では、加陽保育園の三谷園長、0歳児、4歳児のクラス担任の先生方（橋本先生、辻先生）、そして、保育実践の伴走を行ったまちの保育園・こども園 ペダゴジカルパートナー山岸日登美が登壇。今年度の加陽保育園での取り組み、保育実践を通じた子どもたち、そして先生たちの変化を振り返りました。また、保育実践から生まれたドキュメンテーション、子どもたちの表現を中心にした対話形式で、実践からの気づきを報告していきました。

- ・子どもの探究活動を支える「6つのこと」とは。
- ・子どもたちの興味関心から始まる探究プロジェクトとは、具体的にどのようなものなのか。
- ・大人たちは、子どもたちの探究がより深まるように、どのように子どもたちを「誘いかけるような」環境を用意し、関わっていけるのか。

加陽保育園の子どもたちと先生方の探究プロジェクトの事例（0歳児：音の探究、4歳児：あかはらいもりの探究）を中心に、その試行錯誤のプロセスが報告されていきます。





子どもたちは「よく見る」ことで自分なりの感性と考えをもち、「描く」表現を通して自分なりの仮説を立てていきます（加陽保育園の実践事例より）



「探究活動を始めたことで一番変わったのは自分自身かもしれない。」そのように振り返る先生の言葉が印象的でした。まずは子どもの声を「聴く」ことを大切にする、そして、子どもたちを新たな視点をもって見つめることで、自分が子どもの育ちに何を願い、子どもたちに何を感じてほしいかが見えてくる、子どもと向き合うことは自分自身と向き合うことでもあったと語ります。「描く」という活動1つとっても、そのプロセスを丁寧に見つめることで、子どもたち1人1人のもつ思考や価値観、感情を感じ取ること、子どもたちの「100の言葉」を理解することに繋がり、その気付きが園での実践を更に深めていきました。

1年間の実践の中で、自分たち自身に起こった変化、そして子どもたちの姿の変化を、感性豊かに、それぞれの言葉で語られる先生方の姿、保育のアプローチの変化に戸惑いがありながらも、まずは子どもたちを信じてやってみる、そして、園の中で対話を重ねながら、取り組みのはじめのいっぽを力強く踏み出された加陽保育園の先生方の姿が印象に残られた方も多かったのではないのでしょうか。

加陽保育園の保育実践の様子は、「はじめのいっぽ」というタイトルでパブリケーションとして冊子化され、加陽保育園の卒園児をはじめ、その他実践に関わりの深かった関係者に配布される予定です。お手に取られる機会がありましたら、ぜひ、子どもたち、先生方が紡いでいく、驚きや好奇心に満ちた探究のストーリー、探究が深まる中で生まれた子どもたちの力強い表現の数々、家庭や地域コミュニティとのコラボレーション事例など、ご覧いただければと思います。

続いて、子育て支援課の山村課長より、今年度の取り組みを踏まえて策定された、加賀市の掲げる新しい保育ビジョンが共有されました。

加賀市保育ビジョン「学びの未来」を、0歳から。

加賀市では、今年度、レジヨ・エミリア・アプローチからの学びを踏まえた保育実践に加えて、新たな保育ビジョン策定に向けた関係者内での対話に特に力を入れて取り組んできました。

- ・ 私たち大人はどのような子ども観をもっているだろう。
- ・ 私たちは子どもたちをどのような存在だと考えているだろう。
- ・ 私たちはこれからの時代を生きる子どもたちにどのような育ちを願うだろう。
- ・ そんな子どもたちを育てていくために、私たち自身（大人）はどのようにありたいだろう。



(参考) 2023年8月、動橋保育園で開催された対話の様子

保育においてとても根源的な問いである、私たち1人1人のもつ「子ども観」。園での先生同士の対話の中でそれぞれの子ども観を言語化してみると、チーム内で子ども観が共有されていない、という状況がありました。これからの保育で大切にしたいことを考える時、まずは自分自身のもつ子ども観を改めて振り返ること、1人1人のもつ子ども観、保育観の違いに気が付き、共有し合うこと、その上で、これからの保育の中で大切にしていきたいことを大人たちが徹底的に対話する時間を保障していくこと、この一連のプロセスが明日の保育をより良くしていくためのベースになると考えました。そのため、公立園の先生方、子育て支援課のメンバーを中心に、マネジメントの工夫を通じて職員対話のための時間を捻出すること、対話を通じた言語化を積み重ねていくことに取り組んできました。



報告会では、そのような対話のプロセスを経て策定された保育ビジョンの概要が報告されました。新年度明けの4月上旬には、加賀市保育ビジョン 2024-2026 が正式に加賀市 HP 上でリリースされる予定です。

後半セッションは加陽保育園の実践事例を囲んだオープンダイアログからスタート。秋田喜代美先生、まちの研究所代表取締役松本理寿輝、山岸日登美、加賀市教育委員会島谷教育長が登壇しました



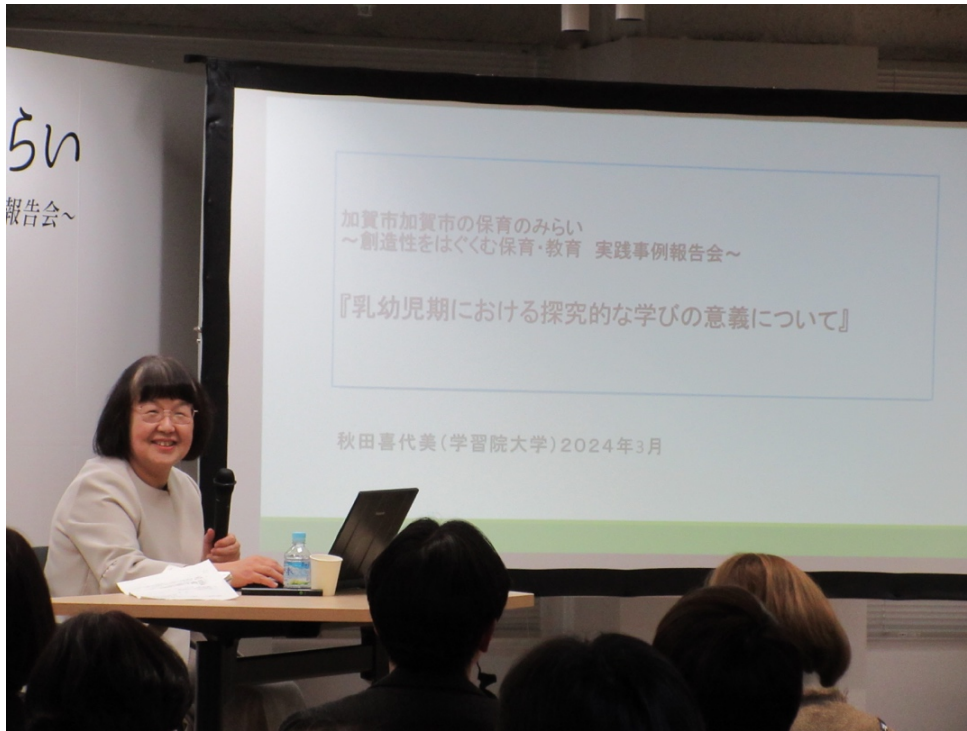
子どもの学びにおいて重要な“環境”や“時間”の考え方

島谷教育長は、「子どもたちの学びの環境づくり」が、保育園現場、学校教育現場を繋ぐ共有項になっていくのでは、と語ります。子どもたちの学びがより深まるような学校環境をいかに作っていただけるか、小学校では、学校指導要領に沿った学びの意図をもった環境作りがより重視される中、レッジョ・エミリア・アプローチからの学びを取り入れた保育園の園環境づくりの考え方や実践（「環境は第三の教師」という思想）は学校環境を考える上でも参考になるのではないか、という点が強調されました。

松本は、加陽保育園、スワトン保育園の保育実践の現場に触れる中で、「Be the Player」を共通項として、自分で動き、新たな価値を生み出す源泉となる学びが、0歳からはじまっているという実感を強く感じたと話します。「学びは感情と共にある」ということを中心においた時、子どもたちがワクワクするような、思わず手を伸ばしたくなるような審美的で美しい環境が良い学びを生み出す土台になっていきます。レッジョ・エミリア・アプローチは教育思想であり、方法論を示すメソッドでないため、その考え方から学びつつも、その国、その土地に合わせたもの、加賀市・アプローチを独自に生み出していきたい。その点においても、加陽保育園の現場で、地域ならではの素材、特に豊かな自然環境から生まれた自然物や生き物たちが、園環境の中に豊かに取り入れられていること、先生たち1人1人の感性やアイデアが生かされた、学びの意図をもった美しい環境づくりが、日常の保育の中で進められていることが印象的なものとして語られました。



また、今回の保育実践を通じて、子どもたちの“時間”、先生たちの“時間”の質がどのように変わったのか、という時間の視点も議論されました。これまでの保育は、大人の都合で子どもたちの活動の時間が「ブツブツと」区切られてしまっていなかったか、子どもたちの学びに合わせて時間の質が担保されていたか。教師が設定する時間ではなく、子どもが自分たち自身で時間を設定できる環境を保障していくこと、自分たち自身で見通しを持って取り組むことができる子どもたちの元来もっている力を信じ、委ねていくこと（スローペダゴジーの考え方）についても、幼保小が共通して大切にしたいことであり、幼保小接続での子どもたちの切れ目ない学びのあり方を考える上でも、継続的に考えていきたいテーマとして議論されました。



最後に、「乳幼児期における探究的な学びの意義について」と題して、秋田喜代美先生がご講演されました。

子どもは元来、生まれながらに探究的な存在

「今、乳幼児教育の現場において探究的な学びがなぜ求められているのか?」「そのプロセスをどう考えたらよいのか?」昨今の教育潮流、日本の子ども政策の変遷、子どもの権利にまつわる議論、全国各地の探究的な学びを実践する園・施設の事例に触れながら話が進んでいきます。

これからの社会では、自ら問い、学びを深めていくことができる探究的な人材が求められており、創造性を育むコンピテンシーベースの学びの場がより一層必要とされてきている、という時代理解の下、レッジョ・エミリア・アプローチの中心に置かれている子ども観 (image of the child) を振り返り、子どもは生まれながらに探究的な存在であり、一人ひとりの表現は、そのものとの関わり方、表現方法、表現内容、いずれも異なり、多様性に満ちている、という前提に立って考えていくことの重要性、そして、民主的な市民を育成していくため、従順のレトリックではなく、探究のレトリックを重んじる教育の本質について語られました。また、Albert Einstein の言葉を引用し、私たちにできることは「問うのを止めないこと」だとし、子どもたちにとっての探究活動の重要性、子どもに寄り添う大人たち自身が問いを持ち続け、子どもたちと共に探究活動を循環させていくこと(共主体：co-agency)の重要性を強調されました。

更に、乳幼児期に探索活動が保障された環境で過ごしていることが、幼児期以降、子どもたちが他者との協働により知識や学びが定着・発展し、深い探究活動に取り組んでいくベースになること、幼児期の探究過程に適した柔軟な時間と空間、環境構成が学びの循環をもたらしていくことなどが、全国の探究的な学びを実践する園・施設の事例から紹介されました。



プログラム終了後には、現地参加、オンライン参加された方から様々な振り返りの言葉が寄せられました。ここではその一部をご紹介します。

<p>1つのもの、音でも、色でも 見方、感じ方、アプローチが違って 子どもたちの表現の仕方も 面白いと思います。 保育者側の見方も、今までは 子どもたちから受けてきた 考えに寄りかかっています。</p>	<p>前半は、周りにくくからり 部分を取り出す。 今、自分から発信がせらぬ から、こころ 30分間のやりかた、感じかた 1人1人指し、自分かた、思 せ、こころ、こころ、自分 かた、自分かた、自分かた 自分かた、自分かた、自分かた 自分かた、自分かた、自分かた</p>	<p>実践事例報告会を聞いて、 子どもは自分かた、自分かた 自分かた、自分かた、自分かた 自分かた、自分かた、自分かた 自分かた、自分かた、自分かた 自分かた、自分かた、自分かた</p>	<p>一年間のこころ、こころ、こころ 性、性、性、性、性、性、性、性 本、本、本、本、本、本、本、本 本、本、本、本、本、本、本、本 本、本、本、本、本、本、本、本 本、本、本、本、本、本、本、本 本、本、本、本、本、本、本、本</p>	<p>友だちから(こころ) 自分かた、自分かた、自分かた 自分かた、自分かた、自分かた 自分かた、自分かた、自分かた 自分かた、自分かた、自分かた 自分かた、自分かた、自分かた 自分かた、自分かた、自分かた</p>
<p>今、何かに興味、関心、見かた、こころ こころ、こころ、こころ、こころ こころ、こころ、こころ、こころ こころ、こころ、こころ、こころ こころ、こころ、こころ、こころ こころ、こころ、こころ、こころ</p>	<p>こころ こころ こころ こころ こころ こころ こころ こころ こころ こころ</p>	<p>1人1人、こころ、こころ、こころ こころ、こころ、こころ、こころ こころ、こころ、こころ、こころ こころ、こころ、こころ、こころ こころ、こころ、こころ、こころ こころ、こころ、こころ、こころ</p>	<p>物、物、物、物、物、物、物、物 物、物、物、物、物、物、物、物 物、物、物、物、物、物、物、物 物、物、物、物、物、物、物、物 物、物、物、物、物、物、物、物 物、物、物、物、物、物、物、物</p>	<p>実践研究、実践研究、実践研究 実践研究、実践研究、実践研究 実践研究、実践研究、実践研究 実践研究、実践研究、実践研究 実践研究、実践研究、実践研究 実践研究、実践研究、実践研究</p>
<p>子ども、子ども、子ども、子ども 子ども、子ども、子ども、子ども 子ども、子ども、子ども、子ども 子ども、子ども、子ども、子ども 子ども、子ども、子ども、子ども 子ども、子ども、子ども、子ども</p>	<p>0才児、1才児、2才児、3才児 0才児、1才児、2才児、3才児 0才児、1才児、2才児、3才児 0才児、1才児、2才児、3才児 0才児、1才児、2才児、3才児 0才児、1才児、2才児、3才児</p>	<p>子ども、子ども、子ども、子ども 子ども、子ども、子ども、子ども 子ども、子ども、子ども、子ども 子ども、子ども、子ども、子ども 子ども、子ども、子ども、子ども 子ども、子ども、子ども、子ども</p>	<p>今日の活動、今日の活動、今日の活動 今日の活動、今日の活動、今日の活動 今日の活動、今日の活動、今日の活動 今日の活動、今日の活動、今日の活動 今日の活動、今日の活動、今日の活動 今日の活動、今日の活動、今日の活動</p>	<p>毎日の生活や遊びの中で 何かに興味、関心、見かた、こころ 何かに興味、関心、見かた、こころ 何かに興味、関心、見かた、こころ 何かに興味、関心、見かた、こころ 何かに興味、関心、見かた、こころ 何かに興味、関心、見かた、こころ</p>

<p>保育者が子育てに必要とする意味、大人の私達から子どもへの感受性。保育者の方にも適切な態度を求められる子育て職に求められる。</p>	<p>自分が今いる現場ではこれほど多い。子どもはこれほど考えがあり、伸ばしたいと感じる。それをどう伸ばせるか悩んでいる。</p>	<p>0歳児の心の発達について、保護者がどう感じるか。</p> <p>実践報告を写真を使って見てもらって、再び話し合いたい。</p>	<p>実践報告、最後の振り返り。いいと思うのは、自分自身が子どもの発達に寄り添っていることだ。大切だ。自分自身も楽しめる。大切だ。子どもも楽しめる。大切にしたい。</p>	<p>「子どもをよくみる」ということの大切さを学びました。まずは花がははのたいと思ました。わくわくね保育をめざします。</p>
<p>加陽保育園の子ども達の創造性を豊かに驚かす。この保育の変化に子ども達は懐かしさ、戸惑い、不安を感じていたり。大人も戸惑いを感じていたり。大人も戸惑いを感じていたり。</p>	<p>ドキュメンテーションの中にはコメントがいろいろあり、それを見ておもしろい。コメントが残る。写真の掲示もいろいろある。コメントが残る。</p>	<p>加陽保育園の先生たちを見て、どの先生も子どもの発達に大切だと感じることがある。自然と見つけようという姿勢。子どもの発達に大切だと感じることがある。自然と見つけようという姿勢。</p>	<p>よくなること、よくなること。自分自身が五感をフルに使って大切だ。子どもも大切にしたい。大切にしたい。</p>	<p>〇歳からか。大切だと感じて。大切にしたい。</p>
<p>新しい取り組みに向けて。新しい取り組みに向けて。新しい取り組みに向けて。新しい取り組みに向けて。</p>	<p>「子どもは」というテーマ。子どもは。子どもは。子どもは。</p>	<p>心が温かくて。心が温かくて。心が温かくて。心が温かくて。</p>	<p>個別報告を通して。個別報告を通して。個別報告を通して。個別報告を通して。</p>	<p>加陽先生方のこの一歩のチャレンジが。加陽先生方のこの一歩のチャレンジが。加陽先生方のこの一歩のチャレンジが。</p>
<p>保育者と、子どもと。保育者と、子どもと。保育者と、子どもと。保育者と、子どもと。</p>	<p>今日「自分」が。今日「自分」が。今日「自分」が。今日「自分」が。</p>	<p>加陽保育園の実践。加陽保育園の実践。加陽保育園の実践。加陽保育園の実践。</p>	<p>素晴らしい発見。素晴らしい発見。素晴らしい発見。素晴らしい発見。</p>	<p>加陽先生方のこの一歩のチャレンジが。加陽先生方のこの一歩のチャレンジが。加陽先生方のこの一歩のチャレンジが。</p>
<p>加陽保育園の取り組み。加陽保育園の取り組み。加陽保育園の取り組み。加陽保育園の取り組み。</p>	<p>創造性、表現力。創造性、表現力。創造性、表現力。創造性、表現力。</p>	<p>今日はどの取り組み。今日はどの取り組み。今日はどの取り組み。今日はどの取り組み。</p>	<p>本音に出ています。本音に出ています。本音に出ています。本音に出ています。</p>	<p>「橋立」のレゾナンス。自分からうまけていく「門」がどのくらい開くか。今までの積み重ねを振り返る。</p>
<p>実践をするにあたって。実践をするにあたって。実践をするにあたって。実践をするにあたって。</p>	<p>子どもと目線。子どもと目線。子どもと目線。子どもと目線。</p>	<p>今日の時間。今日の時間。今日の時間。今日の時間。</p>	<p>来年度。来年度。来年度。来年度。</p>	<p>橋立の子どもと。橋立の子どもと。橋立の子どもと。橋立の子どもと。</p>

私たち、まちの研究所は、加賀市でのレゾナンス・エミリア・アプローチからの学びを踏まえた保育実践（加賀市・アプローチ）の取り組みを、これからも、いつも子どもたちの姿を中心に、「対話」を大切にしながら進めていきます。